



愛隣幼稚園..... 園だより 12.9月号

弱い部分が必要なのです

暑い暑い夏休みでした。9月になりましたが、まだ暑い毎日が続く気配です。うんざりしています。そんな夏休みの毎日を、子どもたちと楽しく(?)格闘し9月を迎えたお家の方にはまずは、「おつかれさま」でしょうか・・・。「わーい、なつやすみだあ」と始めの3日くらいは、親も含めてテンションも上がり気味。お弁当もないし送り迎えもないし、子どもと一緒にのんびり夏休みを満喫しよう・・・と思ったのも束の間。平穏な3日はあっという間に終わり、始まるのは寄ると触る(障る)と兄弟喧嘩の毎日。「あんたたちいいいい加減にしなさい」と、大きな声を出している自分。この先、長いお休みをどうしたものかため息が出ているにちがいない。でも、そんな親の苦労と格闘の賜物でしょうか、久しぶりに幼稚園にやってきた子どもたちの姿には夏休み前とは違う成長を感じます。みんなどこかが変わって、大きくなっているのです。そんなふうによく書くと、子どもたちが所謂、大人の期待するかたちで立派な成長をしているという誤解を招いて、「えっ?」と思われる方もいらっしゃるでしょう。成長する姿、過程は1人ずつ違います。大きくなったということが大人に喜んでもらえる姿で目に見える時もありますが、それが大人にとっては嬉しくない姿で現れることもあります。しかし、よく観察してみると後者もまた立派な成長の一過程だったりするわけです。夏期保育の4日間とこの2日間だけですが、ひとりひとりの少し違う姿に嬉しくなり、また、幼稚園中のひとり一人の成長がそれぞれに違うことも嬉しいことだと改めて実感しています。芳しい深紅のバラに魅了される人もいますが、楚々と咲く名前も知られていないような野の花に心癒される人もいます。そんな花たちと同じように、私たちは誰ひとり同じでなくていい、むしろ同じでない方がいいと確認する2学期の始まりです。

聖書に「私たちはひとつの体である。そしてその体は多くの部分から成っている。目が手に向かってお前はいらぬとは言えず、また頭は足に向かってお前たちはいらぬとも言えない。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。」(コリントの信徒への手紙 12 章 12 節以下抜粋)という言葉があります。8月31日、国立成育医療研究センターと昭和大病院が、新型出生前診断の臨床研究を早ければ9月から開始するという発表をしました。妊婦の血液で、胎児のダウン症など3つの染色体異常を高精度で調べることができるというものです。以前、別の方法でこの診断ができるということが発表された時にも思ったことが、前述の聖書の言葉と共に蘇ってきました。“何のために・・・そしてその診断を受けたら・・・。”新しい命を授かる時、私たちの願いや想いは様々です。抱える事情もそれぞれに異なっています。その中でこの診断を受けることを選択するわけですから、私もその事情に立ち入って是非を言う立場ではないと承知しています。しかし、この神様の言葉が私の頭から離れないのです。私たちの社会は違うひとり一人がそれぞれに役割を担い、そのひとり一人があることによってひとつの社会を形作っています。みんなが頭でも、みんなが目でも成り立ってはいかないのです。更に神様は『それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。』とおっしゃるのです。私たちは誰ひとりとして万能ではありません。心も体も充実し力に満ち溢れる時もありますが、一旦、病を負えば自分が弱者であったことを思い知らされます。そんな時に差し伸べられる優しい手があれば、どれほど勇気づけられることでしょうか。また逆に、助けを必要とする隣人に当たり前と思ってしたこと、心からの「ありがとう」が返ってきただけで、私たちの心は幸せで満たされるのです。強者が生き残り、弱者はいらぬと排除される、そんな貧しい社会になれば誰ひとりとして、心満たされることなく、いただいた命に感謝することもなくなるでしょう。万能な者などひとりもないのです。弱い私は誰かに支えられていることを感謝したいと思います。そして私も誰かを支える者でありたいと思います。どこに「お前はいらぬ」と言われて平静でいられる人がいるでしょうか。私たちは誰も「お前はいらぬ」とは言えないのです。それは「NO」と言えない命に対しても同じではないでしょうか。